

# 学生の声

~Student Voices~

2024

# 中西 和敦さん

出身高校：明治学園高等学校（福岡）

出身大学/学部：英国立バンガー大学/

Marketing with Psychology

就職先：PwC Japan 有限責任監査法人 リスクアシュアランス部



〈留学前〉

**Q. 海外の大学に進学した理由をお教えてください。**

A. 16歳の時に高校のプログラムで参加したイギリスでの短期研修にて、イギリスの大学で学ぶことの魅力を感じ、憧れを抱いたことが一番初めのきっかけ。

しかし高校卒業時、自分には正規留学の情報もルートも無く、一年の浪人を経て日本の大学に進学・上京した。上京した際にも海外留学を諦めきることができず、情報を調べ続ける中で MSA（留学前に在籍していた予備校）と I.F.U の存在を知り、当時在籍していた大学を中退してでもイギリスの大学に進学したいという強い意志が芽生え、受験に合格し進学を決断した。

**Q. バンガー大学を希望した理由。また、その大学を選んで良かったと思う点を教えてください。**

A. バンガー大学を希望した理由は様々ある。

バンガー大学は心理学（Psychology）の分野がイギリス国内で非常に有名であり、ビジネススクールとしても力のある大学であること。自分が専攻したいモジュールが存在していたこと。立地として都市部ではないことから学生生活に集中できる環境であったこと。レベルが特別高い大学ではないため、自分のキャリア的にも無理せず確実に卒業を迎えられる大学であったことだ。



学部選びに関して、元々ビジネス・マーケティング分野中心の専攻を希望していた。

ビジネスは人と人を通じてこそ成立するものだと考えていた中で、現代社会において人工知能（AI）が急速に発展し、我々の日常生活とビジネスの世界に大きな変化と影響を与えると予感した。これをきっかけとして、人工知能が介入しにくいであろう心理学の分野に興味を持った私は、ビジネス・マーケティング分野と心理学の両方を学習したいと思い、それを基準に大学を選考した。

バンガー大学を選んで良かったことは大きく二つある。一つはある程度高いレベルで柔軟に学習できたこと。もう一つは、容易に数多くの人と繋がることができ、人生における国際的な友人関係やコミュニティを広げられたことである。どちらもバンガーという大学を中心とした小さな街だから実現できたことだと感じる。街が小さいため都会と比べると娯楽は少ないが、友人たちといつでも簡単に集合できて何かしら活動することができたのは非常に良かった。

〈ファウンデーション・コースについて〉

**Q. ファウンデーション・コースで学んだ内容で、特に大学学部に入ってから役立ったことは何ですか？**

A. リーディングのスキル、特に長文から必要な部分を抜き出して引用する力は鍛えられた。リスニングは反復的に学習できたことで、オンラインでも十分耳を慣らすことはできた。また、スペシャルサブジェクト（専攻の学部に関連した科目。自分の場合、心理学、数学、ビジネススタディを学んだ。）の学習が大学での授業の予習となり、大学学部の講義が復習になったことで、非常に楽だった。

**Q. ファウンデーション・コース中の過ごし方を教えてください。**

A. 自分の代はコロナ渦であったため、日本でのオンライン授業が半分と現地での授業が半分というイレギュラーな形となった。日本にて授業を受ける際は、時差の関係があったために日常生活でのスケジュールの調整が必要であった。アルバイトをしたり、家族や友人との時間を作れたことは良かったが、やはりオンラインだけで入学に向けて準備をするのは違和感と限界があるなど感じていた。

実際にバンガーに来てからは、コロナの規制がある中で、可能な限りアクティブに活動した。ホストファミリーと常に会話をする中で日常会話の英語力を鍛えた。学校では日本人の同期と高いレベルでの学習目標を立て、大学学部スタートに向けて、努力しながら日々過ごしていた。コロナの規制のため、大学生との交流が難しかった中でも、ホストファミリーを介してローカルの友人を作ることができ、交流は今も続いている。

〈大学学部進級後・大学学部生活について〉

**Q. 大学の学部ではどのようなことを学びましたか？**

A. ビジネス・マーケティング分野の基礎知識から実践的な部分まで幅広く学べた。イギリスの企業や団体についてグループで市場分析したり、コンサルティングしたりと、実用的な学習のレベルは日本と比べても非常に高く感じた。心理学に関しては、ビジネスというよりも医療やヘルスケアの分野の学習をすると共に、顧客心理（Consumer Psychology）の研究やブログ作成などを行い、まさに自分が望んでいた分野を学習できた。

**Q. 大学ではなにか活動をされましたか？**

A.  
部活動：フットボール部、ドッジボール部  
サークル：Japanese Society（部長を務める）



**Q. 大学の授業があるときの平日の過ごし方、休日の過ごした方を教えてください。**

A.  
〈平日〉

基本的には授業に出席することを最優先としつつ、部活動も両立できるスケジュールを組んでい

た。日曜日と月曜日に練習があり、水曜日が公式の部活の試合の日であった。授業が午前と午後  
にあり、部活とソサエティの活動が夕方以降であったので、活動の無い時間は家で休んで過す  
か、オンラインでアルバイト講師をするなどしていた。

<休日>

休みは基本的に授業の入っていない日か、土曜日であった。部活の練習、ローカルチームでの練  
習やリーグ戦が入ることもあったので、丸一日家でゴロゴロ過ごす日はあまりなかった。フリー  
な時間があれば誰かしらと出かけたり遊んだりしていた。長期休暇の際は、友人と遠出したり海  
外旅行に行ったりなどもした。クリスマスシーズンは帰省の時期でもあったため、バンガーにい  
る日本人で集まって過ごすなどもした。

**Q. 滞在方法について教えてください。**

A.

ファウンデーション期間：ホームステイ

大学一年生：学生用アコモデーション (Ffriddoedd village)

大学二年生：シェアハウス (イギリス人 4 人)

大学三年生：シェアフラット (日本人 1 人) , ホームステイ (一時的)



**Q. 海外の大学ならではのと思ったエピソードがあれば教えてください。**

A.

大学が持つナイトクラブがあり、毎週水曜の部活動の日の夜にクラブイベントがある。

教授によっては授業の開始前に爆音で音楽を流してノリノリで授業を始める。

教授と生徒の距離感がいい意味で近いため、授業外でお茶する学生もいる。

フィールドワークがあり、シビアな雰囲気ではなくラフな感じで授業が進むことがある。

講義で使われるホールがイベント会場やパーティ会場になる。

学生団体 (Student Union) の活動の影響力が強く、学生主体である。

どの大学にも 1 つライバル校が存在し、Varsity という毎年一度大学対抗のイベントデイがある。

(日本でいう早慶のようなイメージ)

毎年学生一人一人にチューターがつき、定期的にミーティングを行って学生生活のサポートをし  
てくれる。

**Q. 留学をして一番大変だった経験を教えてください。また、どうやってそれを乗り越えました  
か？**

A. ゼロからの友達作りと部活動に馴染むのが一番大変だった。

コロナ明けでの入学で、バンガーの到着が他よりも遅れたために、新入生イベントなどに参加で  
きななかった。しかし、全て自分から積極的に情報を集めて色々な人にコンタクトを取っていった。  
フラットメイトとも積極的に話すことで、すぐに馴染むことができた。

授業も当初はオンラインであったため、同じモジュールを取っている人を探して繋がるのは苦労

した。最初にできた友人から人間関係の輪を広げて、徐々に人間関係を充実させることができた。積極性と外交的な性格が困難を乗り越える鍵となった。

バンガーは学生の街ということもあり、クリスマスシーズンの休暇などは学生が一斉に帰省するため、かなり寂しい日々を過ごすことが多かった。その時は日本人同士で集まったり、自分が友人の地元へ出向くなどし、一人で過ごす時間だけにならないようにしていた。

〈留学全般について〉

**Q. 留学経験で得たものは何ですか？**

A.

専門的な知識

グローバルな人間関係

日本以外でも生きていける自信

ものごとを俯瞰して捉える力

チャレンジ精神



**Q. 留学の経験を今後どのように活かしていきたいと思いますか？**

A. 留学が終わったら消えていくものとせず、一生残したい。

将来の自分のビジネス、もしくはプライベートに活かすことで人生の質を高めていきたい。

バンガー大学フットボール部 OB として、卒業生が集結する Old Boys にはどこかで参加して交流を途絶えないようにしたい。横の繋がりのみならず、縦の繋がりを広げていきたい。

**Q. 将来、社会人として仕事をしていく上では人脈が大切で、「世界中から集まる優秀な学生と知り合えること」も海外大学進学の特長の一つと言われます。一緒に勉強する学生だけにかかわらず、「人との出会い」という点について感じることを、エピソードがあれば教えてください。**

A. 出会った全ての人とは何かしらの縁があると考えている。

フットボール部に3年間所属して、勉強が全てではないことを学んだ。当然イギリスなのでフットボール自体のレベルは高く、それに加えて言語の壁や人種の壁がある。その環境に飛び込んで周囲に負けないようにチャレンジし続けると、周りは自分を認めてくれて、相互にリスペクトのある素晴らしい関係を築けた。大学で必要なことは、ただひたすらに学業に専念することが一番ではないと断言できる。友人と飲みに出かけたり、フットボールの試合を見たりなど、些細な日常の出来事一つ一つが振り返ってみると学業以上に貴重な思い出となっている。

他にも入学直後の話として、一年生の時に住んだフラットはフラットメイト全員がランダムに振り分けられるのだが、そのフラットメイトと非常に仲良くなり、二年目は同じメンバー5人でシェアハウスまでした。そして今でも全員とはコンタクトを取り続けている。ランダムな出会い方をして、それが一生残る経験と仲間となっている。

日本のことが好きな学生も多く、日本の魅力を伝え続けたことで、実際に日本に渡った友人もいる。他者の人生に影響を与えることができる。

**Q.** 留学となると、語学力、費用面がネックになる人が多いようです。

高校時代、海外大学進学に向けて、特別な勉強をしていましたか？

英語力に関する不安はどのように克服しましたか？いつごろ英語力に関する不安がなくなりましたか？

経済面（留学費用）に関して、奨学金制度などを使っていましたか？

A. 高校時代は特別なことはしていなかった。当時は留学の進路が自分には無かったため、普通に受験勉強の一環としてリーディング、リスニングの勉強をしていた。留学のきっかけとして述べた、イギリスへの短期研修参加くらいである。

英語力は、大学受験勉強で基礎的な部分をしっかり鍛えることができた。ひたすらに単語を記憶していった。日本の大学在学時に MSA (I.F.U と提携している予備校) と出会い、講師の指導の下で英語力を磨いていくことで自信がついた。留学前から実用英語検定準 1 級を持っており、IELTS もスムーズに規定スコアを獲得できてよかった。

スピーキングとしての語学力は完全に慣れであると感じる。現地に住み始めて 3 ヶ月経った頃から徐々に友人らが何を話しているか聞き取ることができ、半年過ぎた頃から会話をスムーズにすることができるようになった。今ではナチュラルにコミュニケーションを取ることができ、大学の様々なイベントやフットボールの試合に出場しても困ることが全くない。

経済面に関しては完全に親頼りであった。多少自分でバイトして工面した部分もあったが、ほんのわずかにすぎない。奨学金は日本のものを使おうと調べたものの、適当なものがなく使わなかった。

〈就職活動について〉

**Q.** いつごろから、どのような形で就職活動を始めましたか？

A. 大学二年生の終わり頃の 4 月にスタートした。ロンドンキャリアフォーラムに飛び入りで参加したのが一番初めの大きな就活イベントだった。その後、同年 6 月の東京キャリアフォーラム、11 月のボストンキャリアフォーラムに参加して、最後にボストンで内定を頂いた。

CareerForum.Net というサイト（アプリ）があり、海外留学生を主な対象として就職活動情報掲載やイベントを行っているので、それを利用した。

また、就活は情報戦であり競争が激しいため、就職活動応援アルファアドバイザーズ事務局に個別指導してもらい就職活動に挑んだ。

**Q.** 日本企業は英語を使って仕事をできる人材として、海外大学卒業生の採用に積極的だといわれていますが、就職活動中、それを感じましたか？また、どんなときにそれを感じましたか？エピソードなどあれば教えてください。

また、英語力以外で評価されていると感じた点があれば、具体的に教えてください。

A. 企業によっては、CEO や代表が直接キャリアフォーラムに出向いて最終面接を行っている。

また、オンラインの事前登録や面接が不要なウォークインシステムを導入している企業がかなり多かった。実際にウォークインを通過して内定を頂くケースは多く、自分もいくつかウォークイ

ン経由で内定を頂いた。

日本の学生や短期交換留学の学生より、海外に正規留学している学生が優遇されている。例えば、海外大学にて行われる企業説明会に参加すれば書類選考は免除される。

英語力以外の評価に関しては、学生生活において個人でどれだけの挑戦をして、学業以外の活動をしてきたかの評価がある。またテンプレのような就活準備は、大手企業ほど簡単に見抜かれてはじかれる。

〈その他〉

**Q. 海外の大学進学を考えている、または迷っている高校生へのメッセージをお願いします。**

A. 迷っているなら行け、と伝えたい。

金銭面的に厳しくても、やり遂げた後のリターンはやらなかった場合と比較しようがないくらい相当に大きいため、親の脛をかじってでも行くことを勧める。

奨学金で入学している学生もいるため、金銭面はあらゆる手段で工面できる可能性が高い。

また現代社会は情報戦であるため、今はイメージが湧かなかつたり、実現不可な状況にあつたりしても、情報だけは調べて集め続けることを勧める。自分がそういう状況にあつた中でも、諦めずに行動したら道が拓けた経験があるため、そう伝えたい。



〈2024年7月インタビュー〉



# 川村 まゆさん

出身高校：アレセイア湘南高等学校（神奈川）

出身（在籍）大学/学部：

バンガー大学/ Social Policy and History

バンガー大学院 修士課程/ Social Policy



〈留学前〉

**Q. 海外の大学に進学した理由を教えてください。**

A. 海外大学進学にはとても興味があったのですが、経済的にも、環境的にもすごく難しい状況で、親の反対もあったのですが、一年間の準備期間や奨学金があることを知り、学校の先生方の支えもあり、決断しました。

**Q. IFU をどのようにして知りましたか？IFU を通じて留学することに決めた理由を教えてください。**

A. 高校が I.F.U と提携を結んでおり、留学を決断する前に問い合わせをした時も、とても丁寧に対応していただきました。大学学部進級に向けて準備をするファウンデーション・コースの制度もあったので I.F.U を通じて留学することにしました。

**Q. IFU を通じて留学して良かったと思う点を教えてください。**

A. ファウンデーション・コースの準備期間を通して英語だけでなく、専門的な知識、大学に入ってから時間管理など、大切なことを学びました。また、大学の手続きや帰国の際にもたくさんサポートしていただき、大学学部進級後も気にかけてくださり、感謝しています。

**Q. バンガー大学を希望した理由、また選んで良かったと思う点を教えてください。**

A. 高校の時に 2 週間、バンガーに研修で滞在していたので、勉強に適した自然豊かな環境のバンガーを選びました。バンガーは広い街ではないのですが、大学には 130 カ国以上からの留学生がいます。街全体が学生街ということもあり、スーパーや文房具店など充実しており、とても暮らしやすいところです。大学内にも他国からの留学生や、ウェールズ語のバイリンガルな学生が多いので、多様な環境、文化の中でよき学びができています。

**Q. 保護者の方は、海外大学進学について、どう感じておられますか？**

【2021 年 2 月時点のまゆさんのお母さまからの回答です】

A. 娘の曾祖父が外国留学経験者でしたので「留学」というものへの抵抗感は一切ありませんでしたが、まさかわが娘が！という感覚はありました。当初、娘は国内大学への進学を考えていました。高校の先生方からは海外大学受験を勧めていただき、本人の努力を認めてくださっているのは有難い、嬉しいと感じていましたが、現実的には越えなければならないハードルが複数あり、

それらすべてをクリアするのは到底無理、難しいだろうと考えていました。でも、決断に最も大きな影響を与えたのは受験期を過ごす中で本人の思いが国内進学より海外大学進学へ次第に大きく膨らんでいったことだと思います。何度も親子で話し合いを重ね、こんなに充実したサポートがある中で進学できるのもひとつの大きなチャンス、本人のやりたいことを最大限かなえてやるのが親の責務、と思うようになりました。

とはいえクリアしなければならない問題は複数ありました。家庭の事情もあり希望をかなえてやりたいけれども現実的には厳しいだろう、とも思っていました。最も大きな問題のひとつは経済的なことでした。しかし、それら諸問題も本人の熱意と比例するように道が拓かれていきました。その他の手続きなどについては IFU の丁寧な事前準備の案内を受けて、何から何まで本人がすべて執り行っていました。本来親がすべきことも娘自身が具体的に準備を進める姿を見て、次第に家族の気持ちも前向きに応援していこう、というふうになっていった、と思います。

初年度（ファウンデーション・コースのことです）は初めて長期に渡って家を離れ、また他人様の家にお世話になる、文化的な違いもあって伝え聞く話に戸惑うことも多々ありました。たとえばちょっとした体調不良でもこちらからサポートできることはほぼありません。反対にただひとりでがんばっている娘に日本の家族の心配事を伝えるわけにもいかず、やきもきしたりもしました。でも本当に IFU の現地スタッフの方、日本事務所の方々に手厚くサポートしていただきました。海外大学学部進級は私ども親の想像をはるかに越え、たいへんな面もあるだろうに、軽々と越えていくような姿を見るのはなんとも誇らしいものです。

また、本当によく勉強している様子に驚いてもいます。勉強量も多くて大変そう、と思いますがとても充実している様子と、インターネットなどでは到底味わえないレベルで文字通り具体的に学問や、人や、文化などを通して次々と娘の世界が広がっていく、世界と繋がっていく様子が刺激的で充実していて羨ましくなるほどです。この先、どこのどんな国に住んで何の仕事をしていくのかは分かりませんが、自分の努力とよき出会いを糧に感謝を忘れず、充実して自分の道を歩んで行ってくれたら嬉しいです。

〈ファウンデーション・コースについて〉

**Q. ファウンデーション・コースで1年勉強してよかったと思うことは何ですか？**

A. 海外大学レベルの英語力が身につけられたことは良かったことの一つで、先生方、スタッフの方にはとても感謝しています。なかでも、時間管理能力の向上と異文化の地で1年間継続できたことが一番の喜びです。朝9時から4時、5時まで毎日授業があり、それに加えて大きな課題もいくつかあったので、正直、思うような結果が出なかったり、毎日が忙しく感じ、また育ってきた環境の違いから、同じ日本人のクラスメイトの間でも意見の対立が起こることがあったのですが、先生、スタッフの方、ホストファミリー、日本にいる家族、その他関わってきた方々の全力のサポートのもと1年間続けられ、新たな海外大学への学部進級のスタートを切れたことをとても嬉しく思っています。また、ファウンデーション・コースの1年間で本当にたくさんの友人や応援してくださる方々に出会えて、今でもその方々とは定期的に連絡を取り合えているので、人脈の幅が広がったのもとても良かったです。

**Q. ファウンデーション・コースで学んだ内容で、特に大学学部に入ってから役立ったことは何ですか？**

A. リーディングとライティング、プレゼンテーション、専門科目の授業が特に大学学部進級後、役に立っています。大学に入ると、膨大な量の本を読み、論文を書かなければいけないため、特にリーディングの授業で教わった要点を掴む方法や、詩を読む際の意味の捉え方などは大学の授業の中でも活かしていると感じています。ライティング、プレゼンテーションは授業や課題の中でたくさん練習をしたので、実際の授業でもあまり抵抗なくできています。専門科目も、現在専攻している教科とつながるところがあり、当時のプリントなどが役にたっています。

**Q. ファウンデーション・コース中の過ごし方を教えてください。**

A. ホームステイは不安なところもあったのですが、実の家族のように接してくださり、第二の家族ができました。ロックダウンが始まり、オンライン授業になったため、ホストファミリーと過ごす時間や家にいる時間が多くなったのですが、ロックダウンがあったからこそ、会話をする機会が増え、より関係が深くなったと感じています。空き時間に一緒に散歩をしたりゲームなどをして、ロックダウンの期間もとても楽しい時間を過ごせました。また、帰国後も定期的にビデオ通話などをしていたので、日本に一時帰国中も英語力が落ちることなく、サポートしていただきました。ファウンデーション・コースの先生方やI.F.Uの現地スタッフの方も、日頃の生活やホストファミリーのことを気にかけてくださっていたので、安心して過ごせました。

〈大学学部について〉

**Q. 大学の学部ではどのようなことを学びましたか？**

A. 大学学部では社会政策と歴史を専攻していました。授業によって学ぶ内容が異なるのですが、歴史ではビクトリア時代のイギリス、ウェールズ史、歴史的遺産などを学んでいました。北ウェールズにはお城などの世界遺産が沢山あり、フィールドトリップを通してそういった場所を訪れることができとても興味深い学びができました。社会政策においては、教育、貧困、ジェンダーなどの社会問題についてその原因、問題、解決策などを議論していく授業が多かったです。政策や価値観なども日本とは違うのでとても面白かったです。

**Q. 大学ではなにか活動をされましたか？（例 部活動 ボランティア活動 など）**

A. 大学学部ではインターナショナルソサイエティー（日本の大学でいうサークルのようなもの）とコーラスグループに参加していました。インターナショナルソサイエティーでは週に1度集まって、フードパーティーやゲームナイトなどを開催していました。3年時にはインターナショナルソサイエティーの幹事を務め、他ソサイエティーと共同で大きなイベントを開催したりしていました。

ボランティアにおいては、校内の新入生や留学生のサポートをするボランティアを大学在籍中全期間通してやっていました。留学生サポートのボランティアでは、留学生サポートが運営する日帰り旅行などにもアシスタントとして同行していたので、様々な経験を積めるとともに楽しい経験もできました。

**Q. 大学の授業があるときの平日の過ごし方、休日の過ごした方を教えてください。**

A. 大学の授業がある日は、授業と授業の合間に次の授業の予習や予習課題などをしていました。社会政策と歴史学科ではほぼ全ての授業で予習課題が出ていました。休日は、まとまった時間を取れるので、課題や試験勉強をすることが多いです。課題が早めに終わった日などは、友達と一緒に夜ご飯を食べに行ったりしていました。

**Q. 滞在方法について教えてください。**

A. 大学一年時は、大学の寮に滞在していましたが、二年時からプライベートの家を借りてシェアハウスをしていました。大学二年時のフラットメイトは一年時と同じメンバーでしたが、そのうちの何人かが卒業や留学に行ってしまったので三年時から全く新しいメンバーとシェアハウスをしていました。友達などと事前に家を借りない場合は、個々に部屋を借りている方とシェアハウスをする形になります。三年時からのフラットメイトは留学生も多く、皆とても良い人たちで心地よく過ごせました。

**Q. 海外の大学ならではの、、と思ったエピソードがあれば教えてください。**

A. 多種多様な国籍や背景を持った学生が沢山いるのは海外大学ならではのだと思います。バンガー大学には130カ国以上の国からの留学生がおり、インターナショナルソサイエティー、ジャパニーズソサイエティー、フィリピンソサイエティーなど多種多様な国のソサイエティーがあります。ジャパニーズソサイエティーなどといっても国籍問わず誰でも歓迎しており、色々なソサイエティーを通してそれぞれの文化を感じることができます。

**Q. 留学をして一番大変だった経験を教えてください。また、どうやってそれを乗り越えましたか？**

A. 勉強も大変でしたが、一番大変だったのは中長期休みの時です。多くの学生が実家に帰ってしまうので、街が一気に過疎化し、一番ホームシックに陥りやすい時期でした。友達のほとんどが実家に帰ってしまっていたので、会って遊べる友達も少なく、課題もやらなければいけなかったのが大変でした。ホームシックは数年いても時折起こるのですが、だんだんと自分の中で折り合いをつけられるようになってきたと思います。また、ファウンデーション・コース中に滞在していたホストファミリーのお家に招待していただいたりと周りの方々に助けられることも多くありました。

〈留学全般について〉

**Q. 留学経験で得たものは何ですか？**

A. 英語力はもちろんのこと、時間管理力や分析力、多様な価値観を養えたと思います。留学はたくさんの方に溢れているので、それを自分のものにするには柔軟性や時間管理力、取捨選択していく力が必要で、長期間滞在していて徐々にそういった力が養われていったと感じます。

**Q. 留学の経験を今後どのように活かして生きたいと思いますか？**

A. 大学在学中にたくさんの貴重な経験とスキルを養えて、自分に自信ができました。その自信と経験を糧により一層成長していきたいと思います。具体的には、大学院卒業後はイギリスで就職したいと考えているので、就職後もスキルを磨いて、より将来の自分の幅を増やしていきたいと思います。

**Q. 将来、社会人として仕事をしていく上では人脈が大切で、「世界中から集まる優秀な学生と知り合えること」も海外大学進学の特長の一つと言われます。一緒に勉強する学生だけにかかわらず、「人との出会い」という点について感じること、エピソードがあれば教えてください。**

A. 大学在籍中、インターン活動やボランティアの経験を通して人との出会い、繋がりを深く感じました。大学一年の頃はインターンなどのお仕事に応募はするものの落ちてしまうことがほとんどで、なかなか機会を得られず苦戦することが多い年でした。しかし、めげずにボランティアなどの経験をつむことで2年時にはインターンを含むより多くの機会をいただきました。また、そこでサポートしてくださった方からの紹介などで大学のインタビューに掲載されたり新たなお仕事をいただけたりしました。また、2年時の経験から、3年時には1年時から目指していたとても倍率の高いインターンにも合格することができました。様々な人との出会いやサポートがあったからこそ実現できたと思います。

**Q. 留学となると、語学力、費用面がネックになる人が多いようです。高校時代、海外大学進学に向けて、特別な勉強をしていましたか？英語力に関する不安はどのように克服しましたか？いづれ英語力に関する不安がなくなりましたか？経済面（留学費用）に関して、奨学金制度などを使っていましたか？その他、何かありましたら教えてください。**

A. 私の出身校ではネイティブの先生との独自の英語プログラムがあったので高校時代はそれに参加していました。そのほかにも、受験英語と並行して、英語を英語で学ぶ訓練や海外の友達と毎日電話でお話をしていたりしました。日本にいた時は自分の英語に多少自信があったのですが、実際に現地に行ってみると自分の英語力に自信が持てなくなりました。最初の半年くらいは会話はできて不安なところがありました。一年ぐらいつと徐々に自信を取り戻してきましたが、言語学習は終わりのないものなので、5年経った今でも日々新たな成長を感じています。

経済面においては、ファウンデーション・コースの期間中から日本学生支援機構の貸与奨学金を借りています。また、大学一年時には大学から特待生の奨学金をいただき、二年時、大学院では留学生に支給される大学の給付奨学金をいただいています。（給付奨学金は授業料の一部免除）

〈就職活動について〉

**Q. いづれから、どのような形で就職活動を始めましたか？**

A. 大学の2年時から履歴書の書き方や応募形態などの情報は調べていましたが、実際に応募を始めたのは大学院の5月ごろです。

Q. 現在のお仕事の様子を簡単に教えてください。

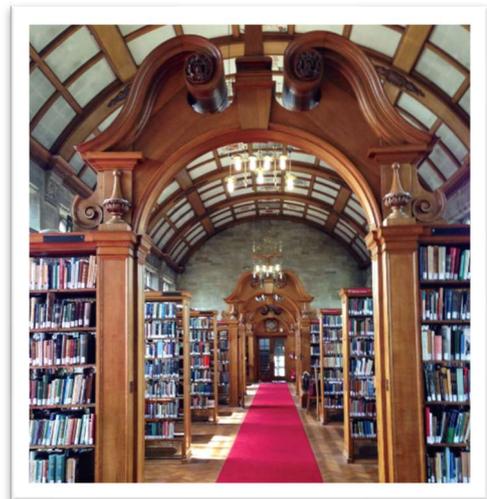
A. 学業の両立などもあり、未だ応募を続けているところです。

〈その他〉

Q. 海外の大学進学を考えている、または迷っている高校生へのメッセージをお願いします。

A. 海外大学に正規入学することは容易ではありません。世界情勢、生活など様々な不安があるかと思います。しかし、一度踏み出してみるとサポートしてくださる方が想像以上にいます。現地で努力をしているとその分、仲間もサポートも増えていきます。必要以上に不安になることはありません。興味がありましたら、ぜひ挑戦していただきたいと思います。

〈2024年8月インタビュー〉



## Trinity Foundation Programme

日本事務局：一般社団法人 国際大学連合 (I.F.U)

〒650-0046 兵庫県神戸市中央区港島中町 3 丁目 1-2 神戸ポートビレッジ 4 棟 201

TEL:050-3541-1880(IP) 078-303-6321 FAX: 078-303-6321

URL: <http://ifu-japan.net>